

「やは肌」考

—— 醉茗の「濱寺を語る」をめぐって ——

山根賢吉

前号で紹介した日本詩人クラブ編「文学談叢」（昭和33年10月刊）には、与謝野晶子関係の文章が二編収められている。一つは河井醉茗の「濱寺を語る」であり、もう一つは、正宮汪洋の「與謝野寛、晶子の詩歌について」である。今回は醉茗の文章を紹介しつつ、私見を加えることにしたい。醉茗は先ず

「明星」といふ雑誌が現代文学史上に重要な地位を占める。それをはじめたのは與謝野鉄幹で、彼が「明星」をはじめた動機を主として話したい。

と語りはじめ、

彼は、或人々から極めて悪くいはれ、又、或人からは極めてひいき目に見られた人であった。鉄幹、独り笛吹けども相手が踊らなければ何ともならない。そこで彼は若い者を

刺戟するために、関西地方にも呼びかけて来た。私は其頃、関西にゐたので多少そのそ間の事情を知って居る。濱寺を中心としてその事情を語りたい。文学史上に於ける、といふのでなく私個人に即して語ることにする。

と述べ、濱寺は自分の居住地堺から近いことは知っていたもの、交通の便が悪く、「松の多い淋しいところで追刺が出来る」と聞かされてゐた。から、「わざ／＼行く程の氣も起らなかった。」ところが、明治三十年十月一日、大阪・堺間の汽車（現在の南海電鉄）が延長され、その初乗りを志し、友人とともに、「濱寺には夕方下車（中略）駅から二三丁、海辺に行った時、友人が、私の信玄袋が破れてゐるといふ。三寸ばかり、切られて財布がすりとりられていた。」誠に濱寺は物騒なところだったので

ある。しかし、「海端に立つと遠く淡路島を望み得、海は遠浅、ちぬの浦波平にして、風光明媚である。松林で休み、茶を喫みたくも一軒の茶店もない」ところだった。

翌三十一年夏、「堺の大濱から宿屋兼料理屋といった風の支店」が出来、そこを個人として利用するようになった。一当時は大阪に小林天眠がゐて、「よしあし草」を出してゐた。堺の私の家へ来て助けてくれないかと云った。三十二年、近畿地方の青年文学者が濱寺に集つて新年宴会をやつた。それが鉄幹、晶子等が後に濱寺に会する素地になつた。」と語り、

與謝野君が私を知つてゐたのは私が詩や歌を雑誌に投書するのでそれを認めてゐたからで、彼が二十八年に朝鮮に行く途次、會ひたいといふハガキをくれたので大喜びして、某寺で面会した。其席には、鐵南も同席したかに思ふ。當時は自由解放の気分が世に漂つてゐた。会つてみると田舎青年の眼には、彼の自由な風態が目立つた。こちらは角帯前垂で先輩の前に畏つた。彼は壯士風で、真岡木綿の着物で、あぐらをかき、盛んに酒を飲み、談論風発といった有様であつた。

と、若き日の鉄幹の勇姿を語っている。場所などについては酔茗の記憶違いもあるらしく、酔茗夫人島本久恵の『長流』(四)

(昭和36年11月 みすず書房刊)では、「大和川北岸の加賀屋新田」の「農家の座敷」で、河野鉄南のほか南部松長も出席していたと伝えている。

やがて酔茗は、『よしあし草』を発行していた浪華青年文学会(のち「浪華」は「関西」と改称)の堺支会を創設したこと述べ、

創設当時の会員名簿に鳳晶子の弟さんの名(籌三郎)がある。「君死に給ふこと勿れ」といふ詩の其の人である。

と語っている。浪華青年文学会堺支会の創設は、明治三十一年十二月で、翌年一月の「よしあし草」第十号の「会員姓名」欄に「鳳籌三郎」の名が見える。「籌」は「籌」の誤植であることは言うまでもない。続いて酔茗は、

それから二、三ヶ月後に鳳晶子の名が見られる。三十二年の「よしあし草」の二月号、第十一号に晶子の詩が載つてゐる。投稿者の名は鳳小舟であつた。「春月」といふ題名。この会を創めるに私は本部を私の家に置き広告を買いて堺全域に人を雇つて千枚も配つた。明治卅一年暮、二回目的作品募集に「春月」といふ題で新体詩を懸賞募集した。会員は三、四十人あつたが、歌、俳句の応募者はあつたが、新体詩は右、小舟一人だけであつた。よつて選抜するまで

もなくそのまゝ載せたわけであった。その小舟が、多分、駿河屋のお嬢さんであらうといふことは判つた。晶子さんの作で最初に活字になつたのは歌でなく詩であつた。と述べ、晶子の詩「春月」を引用した後、

私は卅三年上半期まで堺にゐた。その間卅二年にも、三十三年にも、一月三日に、近畿青年文学会を開いた。その二度目の濱寺の会合に晶子は出席してゐたといふ人もあり、してゐないといふ人もある。会場の鶴酒家の玄関まで来たことは確なのだが、取次の者が男ばかりの席上へ、良家の令嬢を入れるのはどうかとおもひ、追ひかへしたのであらう。玄関まで来た小林天眠が私に伝へたので会報には彼女が来たといふことになつてゐる。

と語っている。このことは、『よしあし草』第二十二号（明治三十三年一月二十八日発行）の冒頭にある「関西文学全好者新年大会」の中に、「鳳小舟子はわざ／＼挨拶に來られたので、但し一々諸子には会はれなかつた」とあり、また「出席者姓名」の中に「鳳小舟」の名があることによつて明らかである。「春月」発表後約一年ということになる。

統いて酔茗は、

この前、私の方から出向くことはないが、晶子さんは女

中をつれて私の家へ来たことがある。手紙は幾通も貰つてゐる。その頃鉄幹晶子はまだ会つてゐない。鉄幹は濱寺の会には会を祝す手紙を寄せてゐる。それは面白いものである。よしあし草の三十三年三月号には、鉄幹の歌二十首、清白や夜雨も寄稿してゐる。夜雨（Y・Y）に「やは肌」といふ詩がある。このことは、晶子より、さきに夜雨がつかつてゐる。

と語っている。鉄幹の濱寺の会を祝す手紙は前掲「関西文学全好者新年大会」の記事中に引用されている。問題は『よしあし草』の「三十三年三月号」である。この号に鉄幹は歌を発表しているが、わずか七首に過ぎない。清白は「すゞしろのや」の号で詩「鏡のひぢ睨」を発表しているが、夜雨の発表しているのは「花妻」であつて、「やは肌」ではない。ただし後述するよう、「花妻」の中に「柔肌」という語は用いられている。

右の事実は、酔茗の記憶違いか、誤植の可能性がある。酔茗談に一致するのは、三十二年三月発行の第十二号である。この号には、鉄幹の「みをつくし（上）」と題する二十首の歌があり、すゞしろのやの「水咫衝石集（一）」と題する十八首の歌があり、しかもY・Yの「やはわた」といふ詩が発表されている。Y・Yは横瀬夜雨の別号である。左に「やはわた」全文を引用し

てみよう。

やわはた

Y Y

今は昔、メルシヤの伯、苛き政をして、所領の民をや
ますこと甚しかりし時、夫人切に諫め參らせしに、衣
ついで馬に乗り、市街を歩まばとの玉ふに、あまりな
る仰よとは思ひ玉ひしが、情深う在しますがあれば、
終に裸体のまゝ、馬上にてまぢ／＼を歩せ玉ひきと人
の語れるに、

しほかぜぬるきはるの海の

おほろつきよのなぎさへに

おもわそむけてみました

つきはむかしのつきながら

たまのみかざりえりにかけ

あかものすそをちにひきて

かべにかけたるはたか糸を

あからめすぎしをとひめの

こがねのみおびときすてゝ

ゆきはつかしきやわはたを

こまのあかきのいくかへり

みやこおほぢにさらしけむ

なさけあぶるゝむねのひに

このよのなりはわするとも

にしきのとばりおくふかく

あやのしとねにをりなれて

ほしうすれゆくあさぼらけ

ひとめやさしきすがたみに

ねみだれがみをかゝぐとて

くれなゐさしゝきみなれば

かへりてきぬをみやぬちに

つけむとゞりしいまさらに

はなとにほへるかほばせの

あつきなみだにぬれぬとは

夢静かなる手枕に

触るゝを許す妻ならば

流石に顔の見にくゝも

可愛き思ひはこもらむに

何か出典がありそうだが、今は見当がつかない。ともあれ、馬上の全裸の貴婦人を歌った衝撃的な作で、品子がこの作に心を引かれたことは、前掲『長流』(四)の次の一節によって明らかである。

『よしあし草』第十二号には、あの筑波根の夜雨のそれはまだ習作の域を脱しないものでしたけれど、「やわはだ」と題する一篇が載っていました。それは民を愛する后が王の暴政をいさめるために、自ら犠牲となつて全裸の姿を馬上にあらわして町をめぐるという海の彼方の物語りを詩にしたもので、小舟女はちよつと注意を惹かれたらしく、「これはどういふお方でございますか」と尋ねたのに対し、幸三郎の答がこの若き友のいたましい病軀のことに及んだのは彼としての極めて自然であつたのでしたが、最初興味を示していた小舟女の顔がにわにか引き歪み「まあ気味のわるい、嫌いですわ」

というと共にはげしく首を振りました。幸三郎はそれを眺め、そこからはもう彼女に何をいう気もしなかつたという。

右の文中の「幸三郎」は醉茗の本名であり、夜雨の「いたましい病軀」は、その「白伝」に「三歳脊椎を傷つけてより、遂に癒えず」と記したポット氏病によると言われている(横瀬隆雄『横瀬夜雨 生涯と文学』)。

さらに夜雨は『よしあし草』第二十四号(明治33年3月)に「花妻」を発表していることは、先に指摘した通りであるが、「花妻」の中にも次の一連がある。

白き蓮の柔肌を

鴨の流れに漉ぎては

鏡になれし黒髪に

釵の房のそよめきて

夜雨は同じ三十三年の九月の「文庫」(15巻4号)に「黄金の舵」を発表しているが、その中にも、

エデンの園の

春たけて

花まづ天に

ちりかへば

柔肌玉と

清き子の

星なすまみも

曇りけむ

とある。その他「沈める星」〔「文庫」十五卷三号 明治33年8月〕にも「柔肌」の語がある。晶子の

やは肌のおつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く

君（初出『明星』七号 明治33年10月）

は、『みだれ髪』（明治34年8月刊）中の代表作であり、晶子の歌の中でも最も広く知られた作であるが、従来この歌の「やは肌」については、薄田泣菫の『葎集』（明治32年11月刊）所収の「村娘」の第四連

誰に語らん、和肌やは肌に

指をさはれば此は憂しや、

潮うしほに似たる胸むねの氣けの

浪とゆらくを今ぞ知る

及び「尼が紅」の「七十一」

かの和肌やは肌に手をふれて、

底そこの泉いづみをさぐりみば

天てん濃のう紫むらさきか、枯木こぼけなる

男の知らぬ趣味を見ん

を指摘するのが常であり、夜雨の作に言及したものとして、管見に入ったところでは、新聞進一氏の『写謝野晶子』（昭和56年11月 桜楓社）に「横瀬夜雨の『夕月』（明治三二）にも、

「やわはだ」の題の詩がある。」との指摘に過ぎない。晶子が

「夕月」を読んだか否かは明らかでないが、「夕月」に収められる前に「よしあし草」に発表された「やわはだ」を読んでいた

ことは、前掲の島本氏の文章によって判明する。

従って、『みだれ髪』の「やは肌」は、泣菫のみならず夜雨の作との関連を指摘するのが妥当ではないかと思われる。夜雨の「やわはた」を受けながら「やは肌」としたのは、仮名遣を改めたと考えてよいのではなからうか。

泣菫がもっぱら「和肌」の漢字を当てるのに対し、夜雨は「柔肌」を出しているが、晶子はいずれの漢字を思い描いたことであろうか。夜雨が愛読した『葎集』には、卷二の人磨の歌に「柔膚」があり、夜雨の「柔肌」にはその影が落ちているかも知れない。

夜雨の詩には次のような部分がある。

真玉手ふれし

みだれ髪

けづるに惜しき
朝ぼらけ

〔醉歌〕—『文庫』八卷一号 明治30年12月

今宵限りをいとせめて
君が腕にみとられて
みすがた消えぬ此胸に
あつき涙のかゝりなば

〔破れ鏡〕—『文庫』八卷一号 明治30年12月

紅洩るゝ
薄絹に
覆し乳も
傷つきぬ

〔星のまびき〕—『文庫』十七卷六号 明治34年
6月

うつゝともなく
ゆめともなく
またまでかはす

にひぶすま

むなわけすぐる

すゞかぜに

みえてもはぢん

はだふれて

〔埋れ木〕—『文庫』八卷六号 明治31年3月

あはれせめては手をとりに

力のかぎりにぎりしめ

ほのほともゆる唇を

耳のあたりにさしよせて

かなしとたゝの一言を

悲しとたゝの一言を

〔もゆる唇〕—『文庫』五卷六号 明治30年6月

「みだれ髪」「腕」「乳」「はだ」「もゆる唇」などの語を一見
ただけでも、これらはすでに『みだれ髪』的世界の開幕を告
げているではないか。

一旦、夜雨の身体状態に嫌悪感を抱いた晶子ではあったが、
その作品世界には注目していたと考えるのが妥当ではないだろ
うか。

酔茗は、その後

私は五月に堺を去った。八月六日頃の歌会で鉄幹と晶子
ははじめて会った。いや、その会の二日程前に、晶子が、
鉄幹を宿に尋ねたかも知れぬ。下打合せをしたかも知れぬ。
(中略) 新しいロマンチズムの起った氣運に乗じた鉄幹
の新派和歌は若い者を刺戟した。根津の下宿に遊びに来た
人達は後年文学に貢献した。その連中の誰彼は堺の女流詩
人からの手紙を羨しがり、見せてくれといったものである。
その手紙は、実に解りにくいもので、美文調とも詩ともつ
かない文章であり、また妙な文字でわかりにくいこと一週
りでなかつた。與謝野夫人となつて日が経つとその字がよ
く解るやうになつた。全く夫の感化である。

と述べ、『よしあし草』はやがて『関西文学』と改題したこと。
そして、

『関西文学』は近代文学史上に書かれてもよいと思ふ。そ
の舞台の一つである濱寺に私が最初の足跡を印したのは、
上述の如くである。

と結んでいる。

(注)『よしあし草』については、日本近代文学館の復刻版

(昭和51年5月)に拠り、夜雨の詩は小野孝尚・春江

両氏編の『校本 横瀬夜雨詩集』(昭和53年6月 中

央公論事業出版)に拠った。